

第1章 総論

1. 総合計画の概要
 - (1) 計画策定の背景
 - (2) 計画の構成と計画期間
 - (3) 持続可能なむらづくりに向けて
2. 東峰村の概要
 - (1) 村の概要
 - (2) 村の現況（各種調査結果の概要）
 - (3) 計画策定上の課題

1. 総合計画の概要

(1) 計画策定の背景

東峰村は、平成17年3月に旧宝珠山村と旧小石原村の合併により誕生してから、令和7年3月で20年を迎えました。

この間、人口減少、少子高齢化への対応として、第1次、第2次の総合計画を策定し、また、国の地方創生の動きを踏まえ、人口ビジョン及び総合戦略を策定し、様々な取り組みを推進してきました。

しかしながら、民間の有識者団体である「人口戦略会議」が令和6年4月に公表した「消滅可能性自治体」において、対象となった福岡県内の8自治体の中でも、東峰村は最も消滅の可能性が高い自治体となっていました。

伝統的工芸品「小石原焼」、「高取焼」などの伝統文化が息づき、岩屋の奇岩群など自然豊かな美しい東峰村が、将来にわたり存続するために、村の現状を把握し、消滅を回避する有効な施策・事業を企画・立案するため、村の進み方を決定する一番重要な計画である「第3次東峰村総合計画及び東峰村人口ビジョン・第3期東峰村まち・ひと・しごと創生総合戦略(以下、第3次総合計画)」を策定しました。

策定にあたっては、審議会やワーキング会議を開催し、村民の皆さんと一緒に検討を行いました。

計画の位置付け

- 基本構想** 10年後の将来像と目標人口の実現に向けた基本目標を示す。
- 基本計画** 基本目標をもとに、前期・後期の2期に分けて取り組む施策・事業を示す。
- 総合戦略** 基本構想、基本計画を踏まえ、対象を明確にした上で必要となる「地方創生＝村の活力向上」を積極的に実現していくための戦略を示す。

(2) 計画の構成と計画期間

第3次総合計画は、村の中長期的な目標人口を定める「人口ビジョン」と、まち・ひと・しごと創生法第10条に基づき、デジタル田園都市国家構想の実現を目指す「まち・ひと・しごと創生総合戦略(以下、総合戦略とします)」と一体的に策定します。

総合計画は、基本構想、基本計画の2段階で構成します。その中で、人口ビジョンは基本構想の中で、総合戦略は基本計画の中で位置づけるものとします。

基本構想は、令和7年度から令和16年度までの10年間、基本計画は、令和7年度から令和11年度までの5か年を前期基本計画、令和12年度から令和16年度までの5か年を後期基本計画として策定します。

【計画期間】



1. 総合計画の概要

(3) 持続可能なむらづくりに向けて

持続可能な開発目標(SDGs：Sustainable Development Goals)は、平成27年の国連サミットで採択された、令和12年までの国際目標です。

このSDGsは、大きく17の目標(ゴール)で構成され、「誰一人取り残さない」を基本理念とし、持続可能でより良い社会を実現するために、「経済・社会・環境」の各側面から総合的に取り組むことで、諸課題を解決することが重要とされています。

国は、SDGsについて「SDGsの推進が地方創生の実現に資する」との認識のもと、国の各種計画、戦略、方針の改定にあたって、SDGsの要素を最大限反映することを奨励するとともに、地方の取り組みを促進する施策を検討、実施していくとしています。

本村においても、SDGsの視点は、総合計画全体に関わることを前提として、計画に記載の施策・事業を進めていきます。

参考：SDGsの17のゴール



出所：国際連合広報センター HP
(https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/sdgs_logo/)

2. 東峰村の概要

(1) 村の概要

①位置・地勢

本村は、平成17年3月28日に旧小石原村と旧宝珠山村が合併して発足した自治体で、福岡県朝倉郡に属しています。福岡県中央部の東端にあって、大分県との県境に接し、英彦山～求菩提山地(東)と古処山～宝満山地(西)との結節点にある中山間地域です。

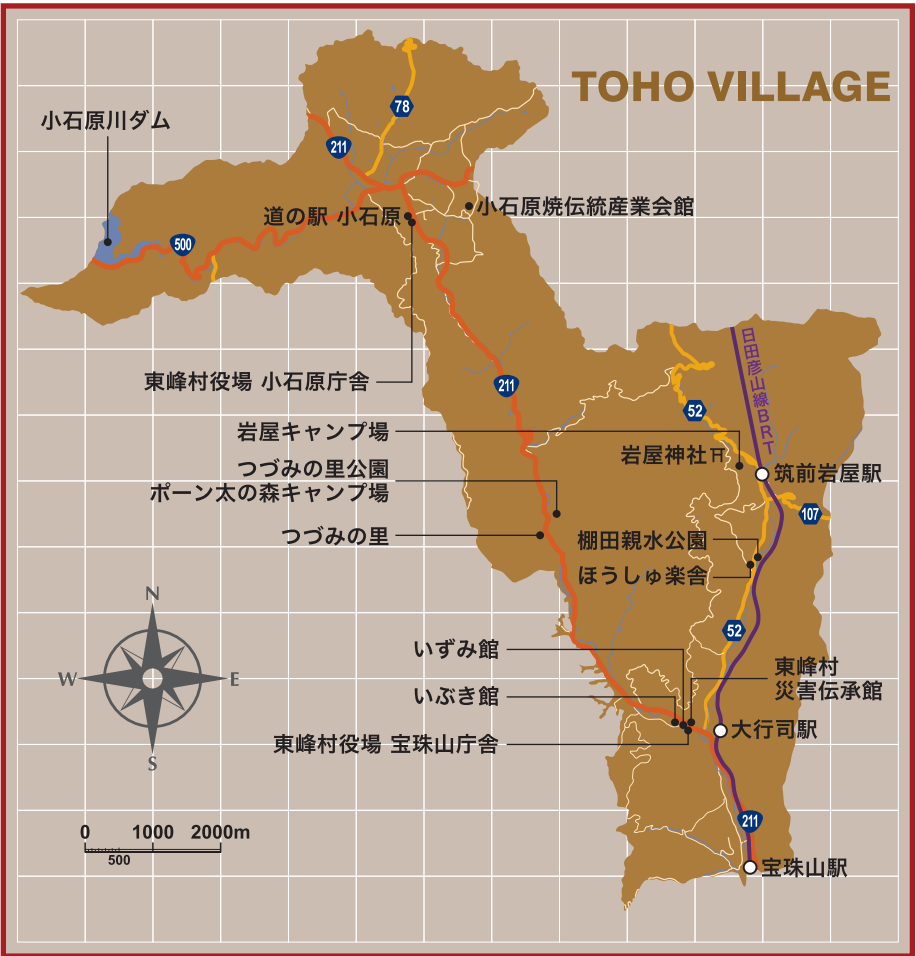
また、遠賀川流域の筑豊盆地(北)と筑後川流域の筑後平野(西南)および日田盆地(東南)との結節点であり、分水界を形成しています。

東から北そして西には標高500～900mの急峻な山地が迫っています。その谷間を大肥川が南流し、大行司で宝珠山川に合流します。宝珠山川は、宝珠山地の渓谷の清流を集めています。北端にある小石原盆地は標高460～480mで湖底盆地といわれています。盆地内の5つの小河川を集めて小石原川が西流し、江川ダムや小石原川ダムの水源となっています。これらの川は、いずれも筑後川に集められ、遠く有明海に注いでいます。小石原盆地を除けば、耕作地はこれらの河川の支流沿いに、断続する小盆地や狭小な平坦部に限られます。山林は、地味も肥沃で美林が豊かに生育しています。

気候は、西九州内陸型の気候(有明海型に属す)で、年間降雨量は1,800～2,800mmと比較的多く、冬季には積雪を見ることが多いですが、夏季は平地より3～5℃ほど気温が低く、過ごしやすい地域です。

②面積

本村の総面積51.97平方キロのうち山林原野が86%を占め、南北に長く、その形状は枝にとまった鳥の姿に似ています。



2. 東峰村の概要

(1) 村の概要

③沿革

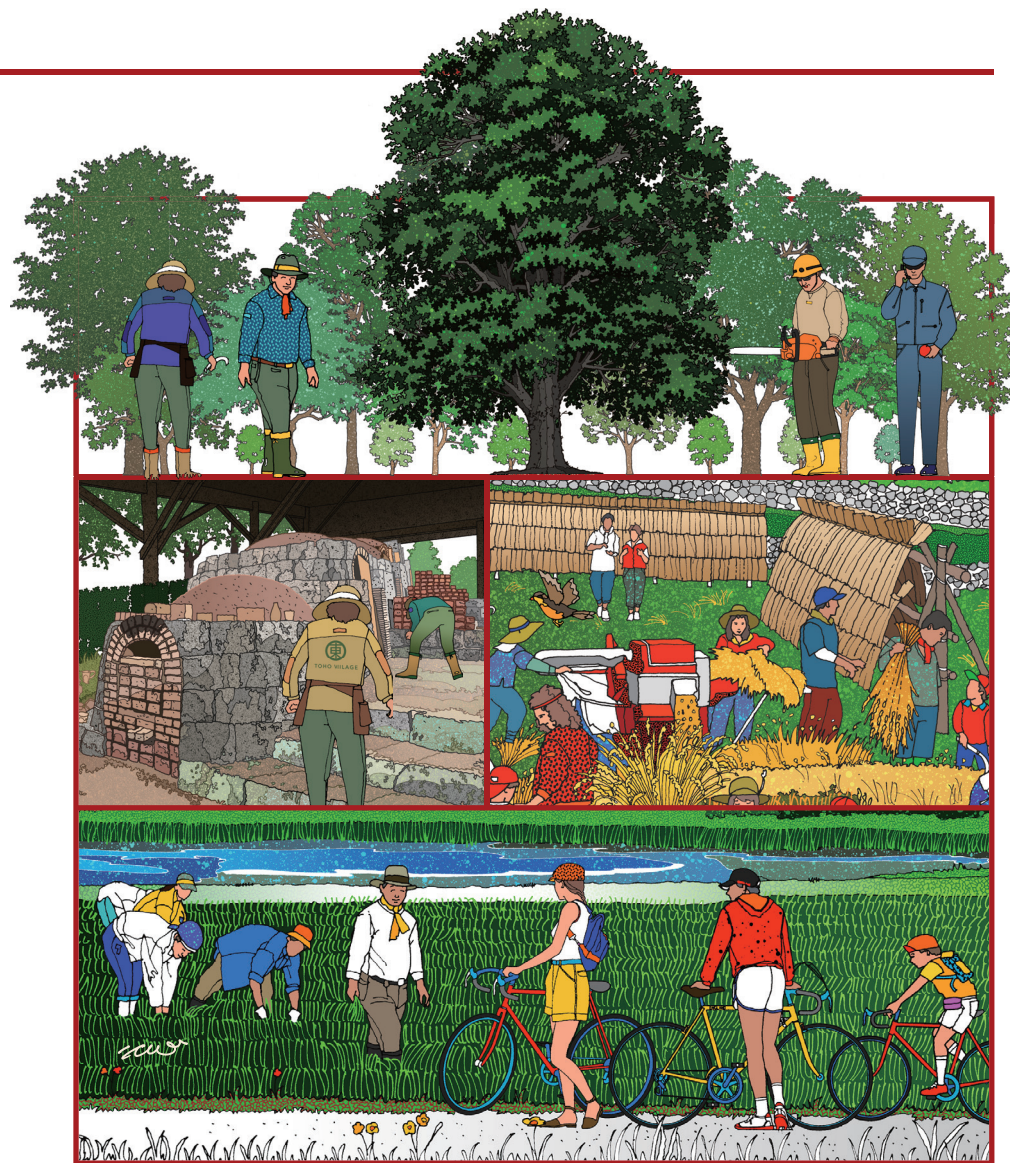
古代から、周辺の峰々は山岳信仰の聖地で、中世以降、修験道が形成されると、英彦山～求菩提山地を胎蔵界、西の宝満山地・北の福智山地を金剛界として、それぞれ春峰・秋峰の峰入り行事が行われていました。村には行場が分布し、現在の小石原地域の主要な集落は行者や信者の集まる宿場町でした。

近世には、筑前・豊前および日田天領を結ぶ要衝となり、参勤交代の脇往還が通り、小石原には関所と境目奉行や代官屋敷が置かれていました。また、朝鮮渡来の高取焼、伊万里の陶工を招いて始まった小石原焼が興り、皿山奉行が置かれました。

山間地が多く農地には恵まれず、戦後までは焼畑耕作が行われていました。地域経済を補ってきたのは、木材・薪炭等の林産業や旧小石原村の製陶業(小石原焼、高取焼)であり、旧宝珠山村の宝珠山炭鉱(明治中期～昭和38年)でした。

小石原地域における製陶業は、昭和40年代前半からの民芸ブームに乗って活況を呈し、この地域の基幹的な産業の位置を占めるようになりました。一方、エネルギー政策の転換によって昭和38年には炭鉱が閉山、また同じ頃から産業構造の変化に伴って林業が徐々に衰退し始め、昭和40年代以降は農業所得と賃労働で得た収入が村民の生活を支えるようになり、その後は、近郊の市町に勤めて得る給与所得が生計の主な収入源となりました。

平成24年及び平成29年、令和5年と立て続けに大雨による大きな災害が発生し、現在も復旧の途上にあります。



*イラストはイメージです。

2. 東峰村の概要

(2) 村の現況(各種調査結果の概要) 統計資料にみる村の現況

本計画策定にあたり、村の現況を把握するため、統計資料、村民アンケート調査、関係団体等へのヒアリング調査を行いました。

○少子高齢化や人口減少が進んでおり、今後も、更に進むと予想され、地域活力の更なる低下、生産年齢人口の負担増加が危惧される

- ・平成12年以降の人口の推移をみると、平成12年に2,948人であったのが、令和2年には1,899人と約1,000人の減少。
- ・国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、令和12年には1,472人、令和22年には1,126人になり、高齢化率は令和2年の45.8%から令和12年53.7%、令和22年56.2%まで上昇。
- ・年齢5歳階級別人口の推移をみると、男女とも75歳以上の人口が最も多く、年齢が若くなるにつれて少なくなる逆ピラミッド型の構造であり、人口減少は、今しばらく続くと想定されるため、地域活力の更なる低下、生産年齢人口の負担増加が危惧される。

○世帯数が減少するなか単独世帯が増加傾向にあり、世帯規模の縮小が進む。今後、高齢者の孤立化や、空き家・空地(耕作放棄地)の更なる増加が懸念される

- ・人口減少するなか、世帯数も減少している。その中で、単独世帯が増加傾向にあり、世帯規模の縮小が進んでいる。
- ・高齢単身世帯の増加が想定され、社会との関係が薄くなることでの孤立化や、空き家・空地(耕作放棄地)の更なる増加が懸念される。

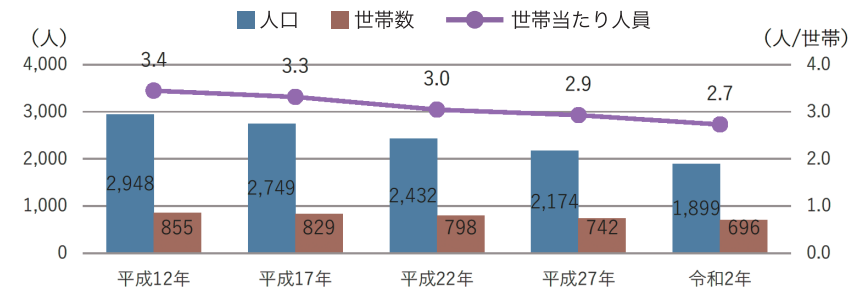
○転出者数が転入者数を上回る状況が続いており、自然減とあわせて人口減少に拍車をかけている

- ・少子高齢化に伴い、死亡数が出生数を上回る自然減の状況が続くなか、転出者数が転入者数を上回る社会減の状況となっており、人口減少に拍車をかけている。

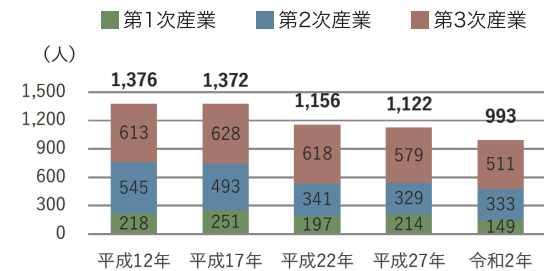
○就業者数が減少傾向にあるなか、特に第一次産業は高齢化しており、存続が危惧される

- ・平成12年以降の産業別就業者数の推移をみると、平成12年の1,376人をピークに減少傾向にあり、令和2年は993人である。全産業で減少傾向にある。
- ・令和2年の就業者の平均年齢をみると、第一次産業が最も高く67.4歳、第二次産業が56.4歳、第三次産業が51.4歳である。第一次産業の存続が危惧される。

■人口・世帯・世帯当たり人員の推移



■就業者数の推移



■産業別就業者の平均年齢(令和2年)

	平均年齢
第一次産業	67.4
第二次産業	56.4
第三次産業	51.4

出所：各年国勢調査

2. 東峰村の概要

(2)村の現況(各種調査結果の概要) アンケート調査結果にみる村の現況

1)実施概要

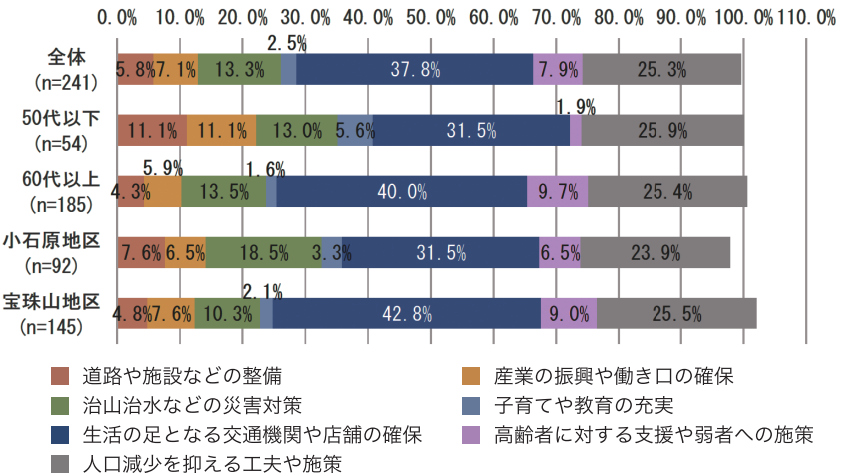
目 的	村の今後10年にわたるむらづくりの参考とするため。		
実施時期	令和6年7月～令和6年9月末		
調査内容	(1)回答者の属性 年代と就業、居住地域について (2)東峰村での暮らし(現況) 暮らしの実感について (3)これからの東峰村像 今後のむらづくりについて (4)自由意見		
回収状況	回答総数：241件 参考：年代別回答者数(※10代は18歳と19歳の人数)		
	年 代	人 口 (令和6年9月末現在)	回答者数
	10代	26	1
	20代	103	1
	30代	122	10
	40代	150	20
	50代	193	22
	60代	325	74
	70代	340	82
	80代	210	28
	90代	108	1
	100歳以上	7	0
	不明・無回答	-	2
	合 計	1,584	241
備 考	・グラフ中の「n」は回答母数、「SA」は単数回答、「MA」は複数回答を示す。 ・今回、全問単数回答の調査であったが、設問によっては複数回答されているものがあり、それは複数回答として集計した。		

2)結果概要

○東峰村での暮らしは、7割以上が満足・普通としているなか、改善して欲しいこととして、「生活の足となる交通機関や店舗の確保」が各年代、各地区ともに最も割合が高い

・買い物の便利さは、「以前より少し不便になった」と「以前よりかなり不便になった」を合わせた割合が7割弱を占め、60代以上、宝珠山地区で割合が高い。

■改善して欲しいこと



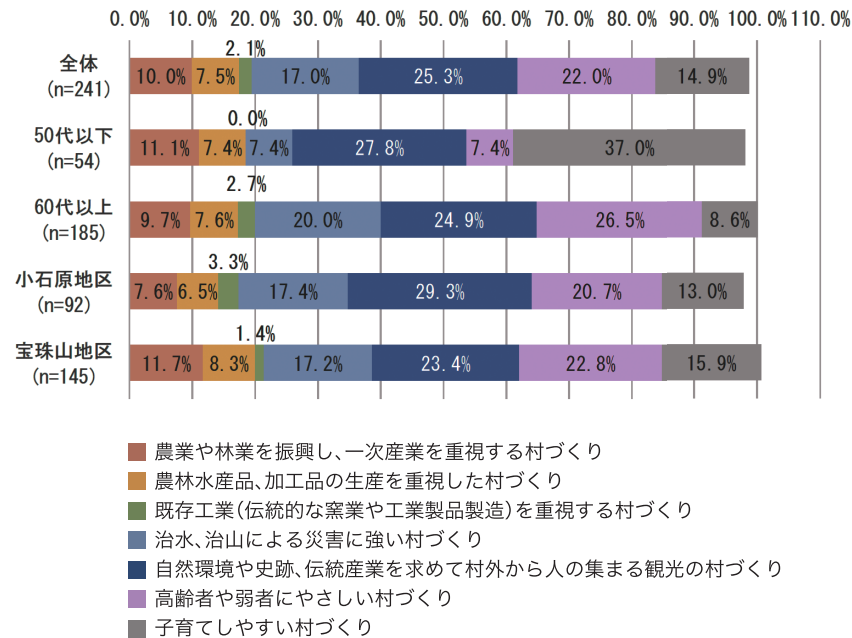
2. 東峰村の概要

(2) 村の現況(各種調査結果の概要)

アンケート調査結果にみる村の現況

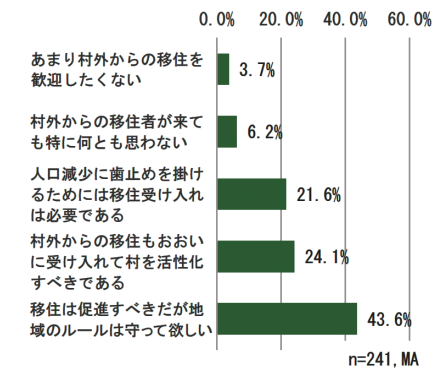
○これからのむらづくりにとって大切なことは、「自然環境や史跡、伝統産業を求めて村外から人の集まる観光の村づくり」の割合が最も高く3割弱を占めるが、50代以下は「子育てしやすい村づくり」を求めている

■これからのむらづくりにとって大切なこと



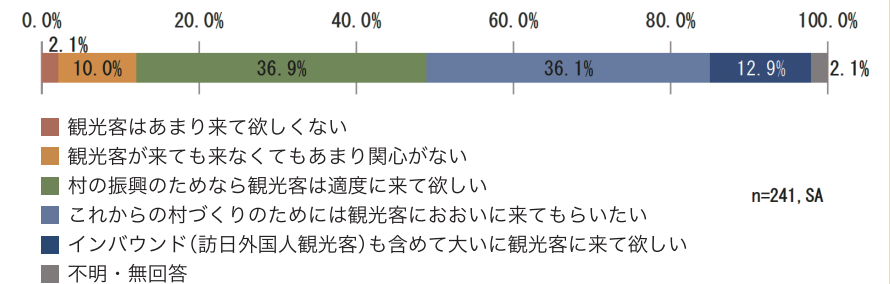
○村外からの移住促進は、9割以上が移住を容認しているなか、4割強は「移住は促進すべきだが地域のルールは守って欲しい」としている

■村外からの移住促進について



○観光客の受け入れは、9割以上が観光客が来ることを容認しているなか、4割弱が「村の振興のためなら観光客は適度に来てほしい」と「これからの村づくりのためには観光客におおいに来てもらいたい」としている

■観光客の受け入れについて



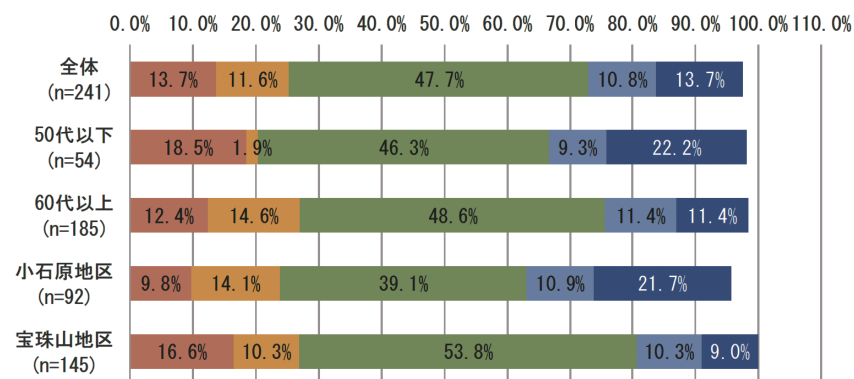
2. 東峰村の概要

(2) 村の現況(各種調査結果の概要)

アンケート調査結果にみる村の現況

○これからの暮らしに不安に思うことは、「人口減少で集落の機能を保てなくなるのではないか」の割合が5割弱を占めるなか、50代以下や小石原地区は、災害への不安を感じている

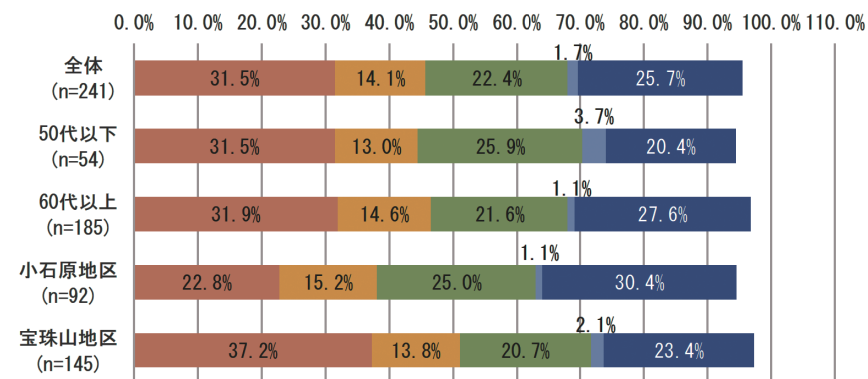
■これからの暮らしに不安に思うこと



- 店舗や交通機関が減り、買い物をすることができなくなるのではないか
- 病院や診療所に行くのが難しくなるのではないか
- 人口減少で集落の機能を保てなくなるのではないか
- 農地や森林が荒れて、生産活動ができなくなるのではないか
- また災害が来て被害を被るのではないか

○もっと素晴らしい村にするためには、「交通や通信などの充実による便利で快適な生活環境」の割合が最も高く約3割を占めるが、福祉や産業・雇用環境も高い割合となっている

■もっと素晴らしい村にするために必要なこと



- 交通や通信などの充実による便利で快適な生活環境
- 豊かな自然や美しい景観・環境
- より収入が得られる職場や生産環境
- 村内外の人びととの交流の場やイベントの機会
- 子育てや教育がしやすく、高齢者や弱者にも優しい制度

2. 東峰村の概要

(2) 村の現況(各種調査結果の概要) 関係団体等ヒアリング調査結果にみる村の現況

1) 実施概要

目 的	東峰村の産業や農林業などの各分野の現状や課題、今後東峰村に期待することなどについて、東峰村で活動している企業や団体を対象にヒアリングを行い、総合計画策定の基礎資料とするため。	
実施時期	令和6年12月16日、12月17日 ※東峰学園PTA、東峰村移住世帯は令和7年1月～2月実施	
ヒアリング対象	<産業(農林業・窯業・観光)> 東峰村商工会、筑前あさくら農協東峰支店、朝倉森林組合東峰村事業所、小石原焼陶器協同組合、道の駅小石原、株式会社宝珠山ふるさと村 <各種団体等> すいとー小石原、岩屋地区・棚田まもり隊、一般社団法人竹棚田、東峰学園PTA <移住世帯等> 東峰村移住世帯	
ヒアリング項目	<産業(農林業・窯業・観光)及びコミュニティ等> ・団体の概要 ・この5年間における団体や村の変化 ・東峰村の良さ、見どころ ・これから東峰村がどのようなようになっていけばよいと思うか ・東峰村に期待すること	<移住世帯> ・移住してきたきっかけ、利用した制度、移住する際に重視したこと、あると良かったと思う支援 ・移住前と移住後の東峰村の印象 ・移住して良かったこと、困ったこと ・地域とのかかわりについて ・東峰村に期待すること

2) 結果概要

【農林業分野】 ●農業の継続に向けて法人組織化や農地の集約化、販路の維持が重要 ●農地の持続可能な管理方法の構築が必要 ●林業の継続に向けた情報の集約が重要 ●継続的に森林管理ができる仕組みづくりが必要 【窯業】 ●働きやすい環境づくりが重要 ・窯業団地を造成し、職場と住居を分離した環境を整備し、窯業の事業継承がしやすい環境を整える。 ・窯業が他都市をリードする存在となる。(「憧れる陶芸の村」を目指す) ●窯業の維持に向けて陶土の確保も重要 ・窯業の維持には陶土の安定供給が必要であり、陶土の確保に向けた取組を推進する。 【観光】 ●情報発信の強化、交流人口増加に向けた仕組みづくりが必要 ・村内の観光地や宿泊先等の観光情報を発信する機能の整備。 ・特産品の開発(わざわざ買いに来るようなお土産)と販売販路拡大。 ・継続的に村に関わる交流人口を増やす仕組みづくり。 ●道の駅の改善が必要 ・魅力のあるものになれば、もっと集客でき、雇用にもつながる。増築して、陶器以外の目玉があると良い。 ●民陶むら祭の開催方法の見直しが必要 ・開催日を増やすことでの来訪者の分散化等。

2. 東峰村の概要

(2) 村の現況(各種調査結果の概要) 関係団体等ヒアリング調査結果にみる村の現況

【暮らし】

●自然を生かした取り組みが必要

●安心して生活できる環境づくりが必要

- ・高齢者が免許返納後の生活も困らないよう、移動販売事業の拡大ができると良い。
(移動販売車両台数を増やす等)
- ・小さなスーパーやコンビニがあると良い。(空き家・空地の活用等)
- ・食事できる場所があれば、お客さんも来て収入も増える。
- ・自転車道路等、安全に通学できるとよい。

●住んでもらうための環境づくりが重要

- ・子育てしやすい(子育てできる)環境づくり。
(住宅、職場、子どもが遊べる環境(公園、図書館、運動公園等の充実)を整備)
- ・空き家活用のPRの推進。
- ・若者でなく高齢者を呼び込むための施策を実施する方法もある。
- ・雇用の場の誘致。

●移住者・若い人が増え、もっと活気が出るのが重要

●東峰村を知らない地域にもっとアピールすることが重要

●「BRT」や「のるーと東峰」等の公共交通の改善が必要

【教育】

●東峰学園の良さを広めることが重要

- ・東峰学園の教育の良さをもっと広報活動で広める。
(子育て世帯が住みたくなる)

●集団登校や下校ができれば良い

- ・毎回車での送り迎えなので、いずれ集団登校や下校が出来たらよい。

●必要な世代に投資することが必要

- ・地域性を生かすために、必要な世代に投資することが必要。

【コミュニティ】

●地域住民が活動を継続できる仕組みづくりが重要

- ・地域活動を取捨選択し、地域にとって必要な活動のみを残す。
- ・住民の地域活動の継続意思のある間に、仕組みづくりを行う。
- ・地元の人が、BRTの駅で、野菜などを販売できるスペースがあると良い。

2. 東峰村の概要

(3) 計画策定上の課題

各種調査結果を踏まえ、本計画策定上の課題を次のとおり整理しました。

●人口減少の減少幅を緩やかにする

- ・ 本村では、昭和25年以降、人口減少が続いており、この流れは、今しばらくは続くと思われています。
- ・ 人口は、村の活力を維持・向上させるために不可欠な要素です。今、暮らしている方がより暮らしやすく、村での暮らしに関心を持っている方が移り住みやすくすることで、人口減少の減少幅を今よりも緩やかにしていくことが必要です。

●学び育つ環境を整える

- ・ むらづくりにおいて、人づくりは全ての基礎となることであり、生涯を通じて学び育つ環境を整え、一人ひとりが持つ可能性を最大限に引き出すことが重要です。
- ・ 知識や能力だけでなく、歴史や文化、地域や周りの人々を大切にし、行動する力を有する人材の育成を図る必要があります。

●働きやすく・働きたくなる環境を整える

- ・ 暮らし続けるためにも、また移り住んでもらうためにも、働きやすく・働きたくなる環境を整えることは重要です。
- ・ 美しい自然が育む農作物やそれから生まれる産品、また高取焼・小石原焼という伝統産業は、村のブランドそのものであり、ブランドの維持・向上に取り組む必要があります。
- ・ 周辺市町村へのアクセスの更なる改善や、デジタル社会に対応した情報通信基盤の整備・更新などにより、村にしながら働ける環境の充実を図る必要があります。

●安全・安心に生活できる環境を整える

- ・ 平成29年7月九州北部豪雨、令和5年梅雨前線による大雨は、村に甚大な被害をもたらしました。復旧・復興に向けて様々な取組を展開しているところですが、いつ起こるかかわからない災害に備えて、防災・減災の取組を継続していく必要があります。
- ・ 人生100年時代を迎えるにあたり、誰もが健康でいつまでも暮らし続けることができる環境が求められています。村民一人ひとりの状況に応じた切れ目ない支援の充実を図る必要があります。

●地域住民が地域活動を継続できる仕組みを整える

- ・ 定住人口が減少するなかで、これまで受け継いできた地域行事や、役務などが出来なくなる恐れがあります。
- ・ 複数の行政区が一緒になり、地域自身で地域の困り事の解決を図る地域コミュニティ協議会の仕組みづくりを進める必要があります。
- ・ 村に縁のある方や、東峰村ファンの方などとの連携を強化し、地域に継続的に関わる機会の充実を図る必要があります。